

ヒロシマ・ルポルタージュ

間野 絢子

中央二丁目

蟬時雨の中、広島平和記念公園には、すでに五万人の人々が着席していた。祈念式典の始まる一時間前、午前七時である。

一九九四年八月六日の広島。四九年の式典に、現職として参列する村山首相の一言を待って、あの日にもまさる炎暑の中、人々は肅然と居並んだ。

団体を記すネーム板があちこちに立っている。私は非核宣言自治体に属した。中野区からの参加者は、区職員四名、長広会会員五名の計九名。参加団体数一三一、出席者三二〇名。(自治体の職員と住民、議員等)

一九八九(平成元)年十二月、一九九二(平成四)年四月、二度まで参議院で被爆者援護法案が可決された大きな推進力は社会党であり、村山首相はその委員長なのだ。首相就任直後は援護法実現を口にした。日と共にその表現が曖昧になって来てはいるが、それでも若しかしたら、今日首相の口から援護法実現の言葉が聞けるかとの期待は虚しかった。

首相挨拶は、今までの自民党首相と変りなく、国家補償は口

にせず、ただ援護対策の充実、強化に止どめた。官僚が作成した文章を読みあげる首相の姿は、もはや社会党の委員長ではない。私達は唇をかんだ。

死者に対しては敬虔に祈るべきだし、「水を、水を」と訴え続けて息絶えた人たちに、市内十六か所の名水を献げることも良い。しかし、根本を解決しないまま来年には、被爆五〇周年を迎えるのだ。

世界は核の恐怖の中に居る。その恐ろしさを一番良く知っているのが、唯一核兵器により破壊された日本ではないか。それなのに、国際司法裁判所へ「核兵器の使用は国際法違反」だとはっきりした意見書を出せない政府。日本は援護法を制定させ得る国力を充分持っている。非核三原則と共にこれを法制化し、世界から核兵器を無くす努力をすることこそ、被爆国である日本の任務だ。それを理念として来た社会党委員長は、首相の座につくや、アメリカの核肯定論に従うのか。

前夜、広島ターミナルホテル・悠久の間で、一三一の非核宣言自治体が集合した大会は、とても有意義だった。こんなには山の自治体が、それぞれ立派な仕事をしている事は驚きでもあった。全国ではその数、一九〇〇に及ぶ。

大阪府吹田市、福岡県粕屋町、愛知県半田市、三重県四日市、沖縄県読谷村よみたんから、いずれも一生懸命な活動報告がなされた。

来賓の長崎市長、本島等氏は、被爆国としての政府の姿勢を糾弾し、平和を願って核兵器廃絶と、被爆者援護法を制定すべきだと説かれた。そして自治体は小さいけれども、新約聖書の「やもめの献金」のように、全力をつくそう、と結ばれた。

特別講演は、考古学者、佐原真氏が講師であるのが意外だったし、考古学ファンの私は嬉しかった。

演題 「文明・戦争・平和」

中学生の参加者もあったため、水準をそこに合わせた、わかり易いお話だった。

『日本の場合、縄文時代は採集の時代で、狩猟、植物を採集することによる食生活だった。従って用いられた弓矢は、食料とする猪いのしし、鹿などを射るためであり、石で作られた矢尻は薄くて小さい。(石鏃)

弥生に入って農耕が始まると、守る村、周りに深い堀をめぐ

らし、外敵に備える環濠集落が出現する。矢尻も重く大きくなり、人を殺すためのものへと変わった。材質も石から鉄へと、より強いものになる。

今、二一世紀を目前にした私達は、文明の恩恵の中に生きている。新幹線はまたたく間に私達を運んで、冷房のきいたホテルで、このような会議を開き、蛇口を開けばいつでも湯や水が出る。食糧も衣類も日本に於いては豊かだ。(世界中に飢餓、戦争、貧困があつたを絶たない事は事実だが)

宇宙にさえ人が行ける時代だ。

しかし、果たして私達は幸せであろうか。動物の中では、ある例外を除き、(チンパンジー同志が、お互いに殺し合いをした事実があつて、この理由は未だ説明されていない)人間だけが常に殺し合いをする。

特殊な例として、「愛食」というのがある。余りに相手を愛してしまったために、その肉体を食べる。「憎食」というのがある。相手を憎んで、ついにその体を食べる。

残酷な例としては、捕虜として捕えて来た人の足を切り、生きながらそれを本人に食べさせ、次に手を、などと言うのがあるが、これは又別の例だ。

雌をめぐって雄が争い殺し合う事があるが、雌が雄をめぐって殺し合うことはまず無い。

石器から始まった道具は、人間の手の延長部分として生まれ

たのに、いかに効果的に人殺しをするかに発展し、ついに核兵器に至った。

戦争を起こす時、どの国も必ず「聖戦」と称する。相手が悪くて自分が正しいのだから、人を大量に殺戮しても正義とされ、戦争の経験が次代に正しく継承されていかない。

国家が兵器を持っていることは、恥ずべき事だし、それを売るのは更に恥ずかしい事だ。国家は国民に相手を憎ませて、戦争に駆り立てる。日清戦争以来、国家は常に相手への差別意識を国民に植えつけ、その勝利を美とした。

一九四五年以降、日本の兵隊により殺された者は一人もいないが、世界では戦争が恒常的に行なわれている。アメリカでは、日常においても銃が無ければ暮らせない国だ。

人を殺すことの罪を知り、戦争を止めない限り、現代の人間は、文明は進んだかも知れないが、人命尊重の環境破壊の点では、縄文時代よりも劣った社会を形成している事になる。

憲法九条を守り、あらゆる政治的立場を超えた非核宣言をしよう』と結ばれた。

広島到着の一日め、八月四日(木)は資料館を見学し、平和記念公園内の碑をめぐる。公園外に建つ韓国の方たちの碑に祈りを捧げる。ここには二〇万人といわれた広島の犠牲者の一割にあたる二万人が眠る。

車で、藤平、海老沢、田中、久保、間野の五名は、東千田町、広島大学を訪ねた。元広島文理科大学であり、この鉄筋三階建校舎の二階、一室が、私の被爆地点である。

当時、この大学及び御真影奉安庫、講堂、図書館、附属国民学校だけが鉄筋造りで、あとの西記念館、事務室、高等師範学校教室、研究室、実験室、音楽教室、寄宿舎、附属中学校、理論物理学研究所のすべてが木造であったために、ペシャンコに押しひしがれて燃えつきた。木造の建物内に居た人、及び校庭に居た人たちは助からなかった。

文理科大学の正面玄関、両側の石柱は被爆当時のままだった。玄関の扉、又その真上の二階ガラス窓も木枠で作って、昔の面影を偲ばせ、建物の表壁は当時の煉瓦風の壁で復元され、「使用禁止」の張り札が玄関にあった。

あの日と同じ八月の照りつける太陽の下、私は四九年ぶりに原点に立った。ここは大勢の人達が瞬時に焼かれて倒れた庭なのだ。多分、即死だった。

長広会会長の藤平先生が、あの日登校していたなら、高等師範学校の木造校舎の中で焼け死んだはずだ。高師附属中学校に在学していた私の弟も、たまたま病気で休んでいたから、永らえたのだ。

横手に折れて、キャンパスの庭に建つ「原爆死没者追悼碑」に行く。

太田川岸より選ばれた重さ四六トンの美しい自然石を、そのままの形で建てた碑は、その素朴さ故に、かえって悲しみを誘う。周りに積まれた自然石と共に、被爆直後の瓦礫の街を表現している。

碑文すらも無い。死没者の名前は別に奉納されていて、計八二四名。

僅かな偶然から私はこの中に加わらなかつた。八二五名となつたかも知れないその一名である私が、今、この碑の前に立つ。藤平先生もおそらく同じ気持ちだったと思う。二人はほとんど同時に帽子を取って、碑の前に頭を垂れ、黙禱した。

大学前の日赤病院は、鉄筋が折れ曲がって、露出したコンクリートの壁を鍵型に記念として保存していた。

二日目、八月五日(金) 晴

午前八時、ホテルをスタート。久保、田中、間野、三名。タクシーで想い出の場所を廻った。

(一) 現舟入高校(元広島市立第一高女、広島市立商業高校が合併)

学校に近い舟入川口町の住まい跡は、街並がすっかり変わっていて、昔の面影を見出す事が出来なかつたが、舟入高校には、当時の広島市女の正門が片側だけ残り、離れた場所には原爆を生き延びた松の木が芽吹き、育っていた。

用務員さんが

「昔の大手が残つとりますけん、行ってみんさい」と言う。

大手? 大手? はて、なんだったつけ。

田中さんが思い出した。

「塀のことよ」

なる程、そうだった。鉄筋コンクリートの塀の一部が自転車置場に沿って、やっと僅かにある。鉄筋がむき出しにさらされ、幾つもの靴跡が残る。誰がつけた跡だろうか。

この大手も、近々取り壊す予定だと、六日の祈念式典後、昼食を共にした同期の友が言った。

「なぜ? 保存したら?」と言う私に。

「古くて危ないもの。あの大手は原爆となんの関係もありやあせん。」と彼女は言い、これに異議をはさむ声も出なかつた。

違う。あれは原爆を体験した。物言わぬ語り部だ。原爆ドームだけが記念のモニュメントでは無い。校舎の片隅に忘れられたように、ひっそりと建つ古びた大手を、危なくないように保存して欲しいと思った。

当時、校庭にあったプールを探したが無かつた。あのプールは、私の父が太平洋戦争も間近い日中戦争のさ中、鉄が手に入らない、物資の乏しい中で、鉄筋を用いずに設計、施工したの

だ。

「鉄筋を使わない二五メートルプールは、日本ではこれが唯一のものだよ」と、私は父から聞かされていた。友達に、あのプールも壊れたのかと尋ねたらば、

「原爆にも、ビクともしないで残った。建った場所に新しくプールを作ることになり、壊そうとしたところ、余りに堅牢で、取り壊す手間が大変だった」との答えが返ってきた。

丁度、お城の石垣のように、あのプールの石積みいしづみの囲いは確かだったのだ。階段状に造られた石組の上に並んで、私達は良く記念撮影をしたものだ。父の入魂の作、原爆にも耐えたプールを惜しげもなく、手間をかけて壊した心が私には測り難い。

(二) 江波えはの海へ行く道を車で走る

以前は、車など通れぬ細い土手上の一本道だった。私達姉弟は、四つの自転車じてんしゃを縦に連ねて、海へとペダルを踏んだ。その土手も削られ、平坦なアスファルトの道が広々と続く。

昔よく行った牡蠣料理の店は、そのまま、しもた屋しもたやとなっていた。

河口でタクシーを降り、天満川てんまんがわの引き潮を見る。川に降りる石垣の段々も無ければ、あんなに這っていた蟹かにもない。我が家へと駆け降りた、土手からの細い道もない。

寂しかった。

(三) 昭和大橋を渡り、観音新町の総合グラウンドに行く。

かつて、女学生の私達が、泥をいっぱい入れたモッコをかつぎ、造営したグラウンドは、広島スタジアムの肩書きの通り、あらゆる施設を備えた、立派なグラウンドとなっていた。

今、ここで各種のスポーツに興じる人たちは、二万人の学徒に課せられた苛酷な強制労働を、ほとんどが知らないだろう。

(四) 観音小学校

観音かんのん小学校は、広い校舎を囲む石垣が美しく、夾竹桃の花が咲き競い、未だ青いいちじくが実をつけていた。

観船橋みふね、舟入橋ふないり。天満川にかかる、この二つの橋は多分新しいものだ。

(五) 戦前のままの観音橋の懐かしさに誘われ、車を降りる。

「老朽のため危険があるので、台風などの時には、車は渡らぬこと」との注意札がかけられていた。

橋の上から川面を見下ろすと、鰯の群れが進んで行く。けれども、なんと汚い水になったものか。昔は、この川で子供達は泳いで育った。見張台の影すら無いのは、もう泳げない川になったことを示す。この時間ならば、私の小さい時には、広島どの川でも子供達が水泳に興じていたものだった。

兩岸の赤い夾竹桃だけは、昔の面影を残している。ふと振り向くと、一人の老人が自転車にもたれる形で押しながら、心もとない足を、一步、一步確かめるように、よろめき進んでいる。もしかしたら、原爆孤老かもと、哀しかった。

(六) 父の被爆地点

午前九時半、父の被爆地点、土橋停留所に立った。父はここで全身を焼かれたのだ。

チンチン電車が通り過ぎる。路線を宮島まで延ばしていた。己斐行き、江波行きも走っていた。

(七) 「体験を語り継ぐ会」に出席

午前十時、Y・M・C・Aのコンベンションホールでの「体験を語り継ぐ会」に出席する。

徳島の方が言うのには、被爆者運動、平和運動をしていると、巡査が訪ねて来て、「そんな事をしていると、息子さんの就職に障るよ」と言うのだと話され、驚いた。

地方では、いまだに戦前、戦中の意識下なのか。

八月六日の平和祈念式典が終り、午前十時現地解散となった。

元安川河畔、平和大橋に近い、広島市立高女原爆慰霊碑の前で行なわれる慰霊祭に列席する。あの日、母校の一、二年生はここで家屋倒壊作業に動員され、全員爆死した。

その犠牲者数は、職員十名、生徒六六九名、併せて六七九名で、広島の中学校、女学校の一、二年生の中で最も大きいものだった。

型通りの慰霊祭の後、白菊を一人ずつ献花した。舟入高校のブラスバンドが、広島市女の校歌を吹奏する。追悼の心を込め

共に歌ったが、ここでも死者への祈りに終始し、国家への抗議、原爆投下への怒りの声は無かった。

あの日、屍が重なり合ったまま浮かんだ元安川は、すべてを包含したかのように静かだった。今夜は恒例の灯笼流しをして、みたまを慰めると言う。

けれども、川底には祈りだけでは済まない死者達の痛み、抗議の叫び声が渦巻き、奔流をなしているはずだ。

国家はこんな少女達までも、無意味な家屋倒壊作業にかり出し、原爆の坩堝で焼き殺した。その死への償いもしないで、五〇年が過ぎようとしているのだ。戦争の後始末をつけないままでの五〇年は、長く重い。

アジアへは侵略戦争を行い、国内では罪なき多くの人々を犠牲にした。あの大きな戦争の責任を曖昧にしたまま、経済だけが発展した国家は、いびつな文化を生み、反省の無いまま、また、過ちを犯すであろう。

私は被爆者としての立場で、核兵器廃絶、被爆者援護法制定への運動に身を投じているが、戦争の犠牲者たちが、それぞれの立場で声をあげ、国家にその責任を問うべきだ。

戦争をひきおこす時には、総力をあげ、税金を使い、教育を奪い、あげくには原爆無残の中に国民を叩き込んだ国家が、敗れては、その責任を取らないというのは、余りに理不尽だ。

安らかに眠って下さい
過ちは

繰り返しませんから

と、広島のいしぶみに刻んだならば、それならば国家は、過
ちを繰り返さないためにも、心して、奔流の底なる叫び声に
応えるべきだ。

